



トピックス

- 白秋を迎えるころ
- 第4回有機農業技術総合研究大会を終えて

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

白秋を迎えるころ

『私は16から父の農業を譲り受け、50年も稲を作ってきた。途中から自然農法に切り替えて、周りからはさんざん嫌味を言われ続け、それでもめげずに皆が安心して食べられる米を、という想いだけで作ってきた。50年とは言ってもねえ、コメは年1回。だからたった50回だよ。前の年にやった工夫がうまくいったのでね、次の年にもう1回やってみたさ。でも柳の下にドジョウは2度といなかった。ああしよう、こうして見よう、そんな繰り返し50回続いたのさ。一度だって同じ結果はなかったね。50回全部違うのだよ。米つくりって面白い。実におもしろかったねえ。』

そう言って、遠くを見てもなく、私を前にして感慨ふかげに話してくれたのは、31年も前のことだった。土壌調査に訪れた東北のとある精農家。父親の代から毎年、流水客土を続けてきたというその水田は、土壌面の高さが周囲の水田とは明らかに違うほど高い。昨年のおり株が残る水田を調査掘りしながら、ふと見た水稲の切り口は、ススキと思うほど太かった。

流水客土のおかげで、毎年たわわに実をつける水稲は稈が丈夫で太く、秋落ちなんぞみじんも心配のない、立派な成長を示していた。真っ黒でねっとりした、それでいて不思議と手の泥汚れが気にならない、耐水団粒がみごとに発達していた水田だった。それこそ手作りの賜物という形容がぴったりする、褒める言葉に何を言い出せ

西村 和雄（有機農業技術会議 代表理事）

ば適当なのか形容のつかない見事な土だった。

年をとるにつれ、あちこちに垢がたまり、次第に頑固、いや頑迷になるのが人のならい。それにしても土や水稲と50年間を謙虚に続けて来られたのは、すごいといわざるを得ない。物言わぬ作物と土とがそうさせたのだろうか。

土は一朝一夕でできるものではない。土壌の中に生息するあまたある生物の群れが、ある一定のベクトルに乗ってこそ初めて「土ができる」方向へと向かう。そんなものである、という気が最近する。土壌中では無数の土壌生物の生き死にがあり、有機物の多寡があり、分解と生成があって、なおかつ作物の生長がそこにある。その無量大数ともいうべき繰り返し、海の波が飽くことなく寄せ続けるように、それでも同じ繰り返しではないことが面白くて仕方がない。そんな感慨を最近抱いている。その感慨は冒頭に述べた真摯な精農家と、愛通じるものがあるように思えてならない。

50年の長きを米つくりにいそまれたその精農家の年齢に、私も近づきつつある。ということは、そろそろ現役を退いて後進に道を譲るべき年になりつつある、ということだろう。

天地機有り。前にも説明したが、天地機（とき）あり、とは酪農学園大学の創設者であり雪印乳業の創設者である黒澤西蔵氏が、一楽照雄氏に伝えた言葉である。

ご案内

第6回有機農業技術公開セミナーin高知

～有機農業の施設栽培を考える～

第6回を迎えた今回は、ついに有機農業における施設園芸に切り込みます。講演発表には根本久氏（埼玉県農林総合研究センター）小田々智徳氏（大地と自然の恵み）安井孝氏（愛媛県今治市）などを予定しています。また、講演発表会の他、圃場見学会も企画しています。詳細は決まり次第順次ウェブサイトwww.ofrc.netにてお知らせいたします。

日時 2009年11月18日（水）13:00
～19日（木）12:00
場所 ウェルサンピア高知（高知県高知市）
参加費 1,000円（資料代）
主催 NPO法人有機農業技術会議
共催 高知県・高知県有機農業推進連絡協議会
後援 農林水産省・高知市・高知大学・JA高知中央会・
高知県園芸連・高知県有機農業研究会

11月18日
基調講演：根本久氏（埼玉県農林総合研究センター）
安井孝氏（今治市企画振興部）
事例報告：小田々智徳氏（大地と自然の恵み） 能勢瞳氏
（IPM実施農家）佐々木一郎氏（いわみ地方有機
野菜の会）
パネルディスカッション
懇親会（別料金）
11月19日
圃場見学会：小田々智徳氏（大地と自然の恵み）

天地のすべてに、しかるべき時がある。そう思えばこそ、そろそろ機（とき）来て動くのではないか、そう思うこのごろである。

最近、何が面白いといって、作物を育てることがたまたま面白く面白い。物言わぬ作物であるからこそなのか、そうではないといたいのだが、それを否定する気もない。昔、20代の後半に経験したことを思い起こすと、やはりそうなのかも思えてくるのだ。

その経験とは、放射線取扱主任者の資格を取らないといけないう羽目になったときのこと。自然農法の大先輩である知人の手助けで、親戚の家に1カ月居候させてもらうことになった。その家が万年青（おもと）の園主だったのである。万年青、この不思議な観葉植物にどれだけの魅力があるのかと、最初はいぶかしげだったが、何冊かの専門書を読ませていただき、気づいたことがあった。万年青をこよなく愛おしいと想いつつ育てている方には、荒んだ人たちを見慣れたり、普段見られないような人生を垣間見ることが（先方は見せる気はないにしろ）多いという職業柄の方が多いのだと。その職業柄を言えば、ただでさえややこしい昨今の世相ゆえ、あえて言わないでおこう。ま、そのうちに「ウインドウ・サイド・ストーリー」なる、いささかパロッド本でも出れば、その中にたっぴりと書いてあるかもしれない、とは、最近私の知人が漏らしてくれたことなのだが。

ふうん。万年青ねえ。有機農業ってのも、案外ややこしいのかもねえ。先日久しぶりに逢った同窓会で、知人はそうも言っていた。ただし、有機農業の世界では、いまだに技術がおろそかにされている。有史以前の状態

だといっちは失礼かもしれないが、いや有史以前の人たちに対して失礼なのだろう。先人は、現代人よりはるかにすぐれた観察力・自然を畏怖すべき謙虚な姿勢・そして何よりも創造性に優れていたのではないか。生涯、在野の考古学者であった相沢忠洋氏の著書を読んだ時の感想ではあるが、元に戻る。

大変失礼な言い方ではあるが、有機農業の世界では、いまだに確固たる「学」がなされてはいない。失礼。理科系に限定しての話であるが。仮説・検証・推論という、3つの考察を粘っこく積み上げてゆく過程が、結構しんどい話なのではあるが、それさえ緻密には、なかなか育ってきていない。経験則と自然科学的知識の切り売り、といっちは甚だ失礼なのかもしれないが、だからこそいろんなまがい物がまかり通ってきた。

断わっておくが、何も現在だけの話ではない。40年前からの、ずうっと起きていた話なのである。ま、そういう話も神話や伝説となるように、若い人たちに笑い蹴とばしてもらいたいものではある。それほど、私は若い人たちに期待している。私が現役で「農」を続けられるのも70までの話。とても冒頭の精農の方のように50回とは行きつかない。だとすればあと10回にも満たない私よりは、50回に期待する方がよかろう。

「イヤ、あいつはダメだ」と年寄りはずぐに言う。だがその人が青かったころ「お前はダメだ」とは言われなかったか。ならば同じ轍は踏むべきではなからうと、私は思うのだが。物言わぬ作物に期待することによって、豊かな感性と鋭い観察力を身に付けてほしいと願っている。

第4回有機農業技術総合研究大会を終えて

去る8月22-23日、熊本県阿蘇郡の東海大学農学部にて開催しました「第4回有機農業技術総合研究大会」（主催：有機農業技術会議、共催：くまもと有機農業推進ネットワーク、後援：農林水産省、東海大学、熊本県、JA熊本中央会、九州有機農業推進協議会）には、地元、くまもと有機農業推進ネットワークの協力のもと、両日で約400名が参加ありました。

基調講演では、東海大学の片野學教授に、有機稲作を中心に九州の有機農業の現状と課題および熊本県の有機農業推進の取り組みを紹介いただきました。稲作、畑作・施設、果樹・茶、畜産などの有機農業の事例集としても活用できます。ぜひ、ご参照ください。

意見交換会（懇親会）には約150名が参加しました。すべての食材を有機農産物で、酒類はもちろん、水まで源水を利用した

話題豊富なこだわりの企画でした。このような懇親会がごく当たり前にできるようになれば、有機農業実施者が増加しても販路に困らなくなるでしょう。

なお、研究大会の資料集『有機農業技術確立のためにV』（1冊1000円で頒布中）は、九州各地の稲作、畑作・施設、果樹・茶、畜産などの有機農業の事例集としても活用できます。ぜひ、ご参照ください。



賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同してくださる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

NPO法人

有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

（財）自然農法国際研究

開発センター

農業試験場 内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net